
令和3年

2月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下10農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

令和3年2月の普及活動状況ダイジェスト版

新たなブランドづくり

下呂農林 ■ 6次産業化の推進 SNS上での商品販売に関する研修会を開催

飛騨小坂あぶらえ生産組合で中心的に活動している農業参入企業は自社商品のエゴマ油を、昨年度から自社のインターネットサイトで販売開始したが、売り上げは伸び悩んでいる。そこで、農業普及課では6次産業化サポートセンターと連携し、同組合員並びに下呂市担当者を対象とした研修会を企画し、2月4日にきこりセンター（下呂市小坂町）において開催した。

コロナ禍の緊急事態宣言期間中であつたことから、講師の6次産業化プランナーとオンラインで繋ぎ、「SNS上での商品販売」をテーマとしたインターネット上の各販売サイトの特徴や、有効な販売方法等に関する詳しい説明や情報提供を受けた。また、個別相談も行われ、参加者にはインターネット販売における新たな意欲が芽生えた。

農業普及課では今後も関係機関と連携し、農業者の6次産業化への取り組みやその質的向上への改善活動に対し、支援を継続する。



【オンライン研修の様子】

多様な担い手づくり

西濃農林 ■ ぎふ清流GAP評価制度 生産者が農場評価を受検

2月16日に、(有)JAにしみの興農社が、西濃管内では初めての、ぎふ清流GAP評価制度の農場評価を受けた。

当日はぎふ清流GAP推進センターの農場評価員により、リーフレタスの農場について書類の確認や作業場等の現地確認が行われた。同社はJAが出資する農業法人で、すでにJGAP認証を取得している。リスク評価の実施や手順書、管理・作業マニュアル、警告表示等、しっかりと整理・管理されており、高い評価を受けた。

管内の農場評価は年度内にあと4件予定されており、農業普及課では事前に評価シートに基づいた助言を行うなど、GAPの普及・推進に向け支援をしていく。



【農場評価の様子】

東濃農林 ■ 岐阜県GAP確認制度 認定書の維持審査

2月上旬、令和元年度に岐阜県GAP確認制度の審査を受けて認定された2戸の経営体に対して、現在の取組状況について54項目の確認、維持審査を行った。

これらの経営体は自己点検、リスク評価を再度行い新たな改善を加えるなど、継続的に取り組みを行っており、来年度、ぎふ清流GAP評価制度への移行が予定されている。意欲的に経営・生産改善に取り組み、信頼される経営体の育成を目指し、農林事務所では継続してGAP取り組み支援を行う。



【現地審査の状況】

※ ぎふ清流GAP評価制度

「食品安全」「環境保全」「労働安全」等について農場の運営システムや手法を点数評価するもの。生産者が取り組みやすく、かつ上級グレードの国際水準GAPを目指せる制度として、令和2年11月から岐阜県が運用を開始。評価点数が一定水準を満たす生産者はロゴマークが使用でき、消費者へのPRも可能。

※ 岐阜県GAP確認制度

平成29年10月にGAPの共通基盤に関するガイドラインに準拠した岐阜県GAPを策定。岐阜県GAPに基づいて生産活動を実践していることを県が確認する制度を平成29年11月に開始。東京オリンピック・パラリンピック競技大会の食材調達基準を満たすものであり、令和3年9月末で終了。

揖斐農林 ■ 次世代人材投資事業 **サポートチームによる新規就農者の就農状況面談**

就農後の定着を図るため、農業次世代人材投資事業が平成24年度から始まり、揖斐地域でも就農者が増加している。当事業の活用者等に対して、半年に一度、作物の生産や販売の状況、経営費など収支の状況を確認するとともに、改善指導している。

2月16日に揖斐川町、2月24日に大野町の新規就農者を対象に、サポートチーム（町、JA、農業普及課、農業振興課）による就農状況報告面談を行い、就農状況の把握及び相談対応を行った。

今後、池田町において同様の面談を実施し、経営安定に向けた継続的な支援を続ける。



【面談の様子】

郡上農林 ■ スマート農業 **農業大学校にてスマート農業の特別講義**

農業普及課は2月10日に農業大学校の野菜・果樹学科学生18名を対象とし、今年度取り組んだ「ひるがの高原だいこんスマート農業実証プロジェクト」の特別講義を行った。

講義では、「ひるがの高原から広がるスマート農業」と題したプロジェクトの紹介動画のあと、現地で取り組んだスマート農業機械の実証結果について、分析データなどを用いて説明した。また、学生が栽培している野菜や果樹について「こんな機械や仕組みがあったらいい」といったスマート農業への新たな提案レポートの作成に取り組んでもらった。

農業普及課は実証プロジェクト等の成果をもとに、若者が夢を持つ農業を目指して、スマート農業の普及に取り組む。



【スマート農業の特別講義】

恵那農林 ■ 集落営農・法人化 **「農事組合法人 角領営農」が設立！**

中津川市加子母地区で水田営農を行う角領機械化利用組合は、本年度の法人化を目指して検討を重ね、2月5日に設立総会に至った。

法人化に際し、農業経営者サポート事業を活用し、JA・市・ぎふアグリチャレンジ支援センター等関係機関の支援を受けてきた。農業普及課は、関係機関との連絡調整等を行い、各機関の連携による一体的な支援を行ってきた。新設された法人の組合員は、旧組合の24名から構成され、約6.3haの経営規模でのスタートを見込んでおり、加子母地区の水田農業の中心的な担い手として、今後の農地集積拡大等の取り組みが期待される。

農業普及課では、今後も法人化後の安定経営に向けて、栽培技術指導等を行っていく。



【法人化検討会】

飛騨農林 ■ 担い手 **人・農地プラン検討会で耕畜連携の活動事例紹介**

中山間地域の水田農業は、水田一枚の農地面積が小さく、平坦地に比べて作業効率が悪いということもあり、水稻生産の担い手への集積も限界になりつつある。このまま高齢化による離農が増えれば、耕作放棄地の問題がさらに深刻化する懸念がある。

そのような状況に対し高山市朝日地域では、稲発酵粗飼料（WCS稲）を耕種農家が栽培し、畜産農家が刈取る形で交付金を活用した水稻の生産が行われている。地域で生産体制が整えば作期分散ができ、担い手への集積面積が増やせる可能性があることから、生産者、市、農業普及課でWCS生産体制の検討を行い、今後の波及を目指している。

この取り組み事例を2月12日に開催された「人・農地プラン検討会」で紹介し、各地域で「人・農地プラン」を考えるための参考としてもらった。農業普及課では、今後もこの朝日地域の取り組みを支援し、水田農業の維持を後押しする。



【WCS稲生産の事例紹介】

農業革新支援センター■普及指導員 **新品種・新技術習得支援研修（果樹の新樹形）の開催**

2月19日、果樹担当普及指導員6名を対象とし第2回「新品種・新技術習得支援研修（果樹の新樹形）」を開催した。本研修は講義や現地実習を通じて、果樹の最新技術である新たな省力樹形の知識・技術の習得を図る目的で開催している。

今回は大垣市において「ナシ盛土式根圏制御栽培法」について、栽培状況の確認と整枝剪定作業の実習を行った。当栽培法は早期成園化、多収、作業効率化を期待できる果樹の新技術であり、平成29年3月に導入されている。

県内には他に「ジョイント栽培」や「超低樹高栽培」等様々な省力樹形が導入されつつあり、普及指導員の知識・技術習得を図ることで、果樹産地の活性化を図りたい。



【ナシ新樹形の剪定実習】

売れるブランドづくり

岐阜農林■スマート農業 **第7回コンソーシアム会議を開催**

瑞穂市の（農）巣南営農組合では国のスマート農業加速化実証プロジェクトの採択を受けて、スマート農業機械（ロボットトラクタ、ドローン等）を駆使しながら輸出用米と小麦を組合せた3年5作体系の現地実証に取り組んできた。

2月3日、2ヶ年の実証成果について検討するためコンソーシアム会議が開催された。コロナ禍のためリモート会議とし、農業普及課から各種調査結果の報告を行った。各種スマート農業機械の作業効率や、実証法人における経営成果について協議を行い、スマート農業機械は作業効率の向上や新たなオペレーター育成に有効であるとの結論に至った。

農業普及課では2ヶ年の実証成果について、管内の農業法人や大規模農家に情報提供を行いスマート農業の推進を図っていく。



【リモート会議の様子】

中濃農林■JAめぐみの水田農業担い手協議会 **水稻「あきさかり」栽培検討会の開催**

中濃地域の水稲栽培では、「コシヒカリ」や「あさひの夢」の出穂期から登熟期の高温障害による品質（格付）低下が課題となっている。そのため、平成30年から担い手を中心に「あきさかり」の導入を推進し、平成31年度に県の奨励品種となった。

2月17日に栽培検討会が開催され、今後「あきさかり」の本格導入と所得向上に向けて、JA・全農岐阜・関連農林事務所間で令和2年産の実証ほ試験結果について情報共有を図るとともに、令和3年産の試験計画等について打ち合わせを行った。

農業普及課では今後も関係機関と連携して支援していく。



【検討会の様子】

可茂農林■堂上蜂屋柿 **剪定講習会にスマートグラスを活用**

2月14日、美濃加茂市堂上蜂屋柿振興会において剪定講習会が、会員約30名が参加し開催された。

講習会では講師を務めた普及指導員がスマートグラス※を着用して剪定作業を行った。これによりパソコン等の端末に講師目線による剪定作業を記録することができる。講師は樹全体に日が当たるように混みあった枝を剪定すること等を、実際に作業を行いながら解説した。今回の映像は保存し、振興会が進めている「堂上蜂屋柿生産マニュアル」の資料として活用される。

今後は、摘蕾作業や摘果作業等についても映像を撮り、生産マニュアルの充実を図る。

※ 眼鏡のように装着し、グラス越し映像を映し出す機器



【講習会の様子】
(スマートグラスの説明)